三十五圓の月給を貰つて居つたのです。それも卒業後二度も轉職した後だつたさうですが、ある日、店の退ける頃、主人から使ひに行つてくれと言はれ、

「店の退ける三十分ぐらゐまへになつて、遠いところへ使ひに行けとは何事だ。雀の涙ほどの月給を呉れておきながら……」

と思つて、溢り〳〵出かけたさうです。用を濟まして遲く郊外の道を家へかへる途中、偶然、商業學校時代に目をかけてもらつた校長にあひ、「君は今何をしてゐるか」ときかれ、實はかく〳〵の始末と語つてから、

「まことに面目もありません、何しろ主人が、かういふ風で、時間過ぎの今ごろまで使つて、三十五圓しか呉れませんので。」

と言ひましたら、校長は溫顏を曇らして、

「それは君、心掛けが違つて居りはせんか。君は時間と金に囚はれてゐる。時間には限りがあるが、人間の働きには限りがない筈だ。自分で自分の仕事を時間で區切つて置かずに、働けるだけは働きたまへ。君の働きのみが君を活かし、君を大きく

するのだ。

三十五圓〳〵といふが、そんな氣持で使はれてゐるなら君のねうちは一代三十五圓に決つたといつてよいのだ。君は君の無限の力を小さく〳〵限つてゐるから、いつまで經つても、それ以上出ないのだ。使はれてゐると思ふから仕事が重荷になる。一つ奮發して店全體を背負つて立つて見たまへ、夜おそくなつたぐらゐで腹が立つやうなけちな心は

なくなつてしまふものだ。」

これで校長は別れて行つた。

友は長らく立ちどまつて、その後姿を拜んだ。よし！　この恩師の戒めによつて、おのれを捧げて働かう。人間は働くために生れて來たんだ。よしやるぞ！と、その日から生れ變つて骨身惜まず働いたら、主人には喜ばれる、月給は上る。そのうち別に店を出して貰ふ、店のものと一つになつて働けば店のものもよく働く。それでまア今日あることが出來た、これも恩師のたまものだ……

と、友は涙ぐんで語りました。

己れを空しくし、己れをさゝげて働く――、上も下もこの心で協力一致すれば、何事も成就せざるなしとは、舊くして常に新たなる大眞理であることを、私たちは肝に銘じてゐなければなりません。

與へられた處を喜ぶ

◇南洋から戻つて來た青年

一昨年の夏、南洋の視察から歸つて來た知人のK氏は、一人の青年を伴れてゐました。それは半歳ばかり前に、南洋開拓の先鋒になるんだと、えらい勢ひで出掛けて行つた男なので、どうして歸つたのかと聞きゐすると、脚氣にかゝつて非常に苦しんだからだといふのです。で、私は、

「折角行つたのに、なぜもつと頑張れなかつたかな。」

と殘念がりますと、

「とても我慢ができませんでした。美しい椰子の林の下で南國情緒だと喜んだのは、行つた當座だけで、暑さはひどいし、生活ぶりはまるで違ふし、だん〳〵苦しくな

ると日本が堪らなく戀しくて、仕事も何も手につきません。そのうちにひどい脚氣にかゝつたので、Kさんに連れて歸つて貰つたんですが、船が臺灣あたりに來ると、脚氣は嘘のやうにけろりと癒つてしまひました。」

そして、南洋には脚氣になやんで、故國への歸心矢の如き人がずゐぶん多いといふのです。南へ伸びようとする日本將來のために、困つたことだと思ひました。

どうして、そんなに脚氣にかゝるのでせうか——？

「病氣」の原因は明かにされても、「人間」がなぜ「病人」になるかについては、まだ研究の手が十分伸びてゐません。しかし精神が肉體を左右することは、一般に認められて來ました。私は幾多の實例から推して、その與へられた處を喜ばない——卽ち南洋に行つて、南洋を喜んで働かうとしない、さういふ了簡を持つ人の中に脚氣患者を多く見出すのであります。

理窟は後廻しにして、まづ事實を見て下さい。手近なところでは、東京遊學の學生が大抱負を提げて來たものゝ、下宿屋の亂雜や市中の喧騷などに惱まされて東京に

幻滅を感じ、故郷の空なつかしく頻りに感傷氣分になると、脚氣の症狀が出てくるのです。轉任になつた官吏や會社員などが、今迄ゐた處に心を牽かれ、新任地で喜んで働かうとしないと、脚氣に犯される場合がこれ亦實に多いのであります。

刑務所の囚人の中で、贖罪のために甘んじて刑に服するといふ氣持ちが

なく、たゞ〳〵自分の境遇を呪ひ、刑を課した裁判官を憎んだりする人は、大抵脚氣に罹るといふことです。これは又聞きですが、勿論事實であらうと思ひます。

◇處に應じて氣持をかへる

醫學の方では、偏食のためビタミンBの缺乏が脚氣の原因だといふのであります。ではなぜ、人は偏食するのでせう？　これが根本の問題になりますが、兎に角、一切のものを受け入れることの出來ない頑な心、卽ち『我』のつよい人は、食べ物の好き嫌ひがつよくて偏食となり、與へられた處や仕事などすべてに好き嫌ひの心がはたらくのであります。

が、どんなに嫌つても、嫌はれた對手は平氣で濟ましてゐます。蒟蒻ぎらひの人が厭だ〳〵と騷いでも、蒟蒻はこの世の中にちやんと存在してゐるやうに、東京を厭がり南洋を嫌ひぬいたところで、その東京や南洋は消えて無くなりはしないのですから、結局自分の方ですゝご〳〵退却する外はなく、折角の目的も抱負も無駄にな

つてしまふばかりです。

ではどうすればよいかといふに、その物に應じその處に應じて氣持ちをかへる——南へ行つたら南のやうに、北へ行つたら北らしく、すぐ氣持ちをかへてそれに適應する心の自由さ、素直さ、朗かさが欲しいのであります。

山の中にゐた人が海邊へ移つて來て、どうも山の中のやうな暮らし方ができないといつて不平をおこしたら、いゝ笑ひ草にされませう。だから東京に來たら東京に、南洋に行つたら南洋に、或は甲から乙の轉任地に、嫁に行く人は新しい家庭に、その他どこでも與へられた處にすつぽり適り込んで、それを喜ぶ氣持ちにならなければなりません。

私は南洋から歸つて來た青年に以上のやうな話をした後で更に言ひました——南洋に行つた以上、日本にゐて誰にもできる平凡なことをしてゐるよりも、遠いこの地に來て、海國日本が南進への御用をさしてもらふことは男子の本懷である。喜んで大いに働かう——と不平不滿の心を萬里の長風に吹つ飛ばせば、脚氣も一緒に

飛ばされてしまつて、必ず健康を取り戻すことができると、言葉をつくして激勵したところ、その青年は奮起して再び南洋に赴いたのであります。

半歳ぶりで手紙が來ましたが、それには、――朗かに、喜んで働いてゐますが、いよ〳〵健康で、前途にはつきりした希望を持てるやうになり、地獄の猛火と思はれた此地の熱風も、今は極樂の清涼の風と變りました。知人の脚氣にかゝつてゐるものや、意氣銷沈してゐる連中に、お説の受賣りと共に私自身の體驗を話すと、みな生れかはつたやうに元氣を取り戻し、緊張して働きだします。本當に有難いことだと思ひます――と書いてありました。

◇職業少年の危險期

今まで述べたことは、主として甲から乙へ移るといつた場合についてゞすが、必ずしもさうと限ることなく、與へられた職業を喜んで懸命に努力することが亦實に大事であります。それには少年の頃から精神的に訓練して置くべきものですが、實

際を見ると、職業戰線に出てゐる少年などは、早くから轉業また轉業といふ狀態であります。

少年が職業にありついてから三ヶ月目は、轉業の危險期ださうです。家庭にゐた時に比べると、どんな勤めでも辛く感じるので、一月二月とすぎて三月頃になるともつと樂なところをと自分で探し求めるのもあれば、それを我慢してやつと職業が身につきかゝつた時に、親たちは、何處そこの方が日給は五錢高いとか、仕着せが多いとか聞き込み、子供をそゝのかして轉業させる場合も多いのださうです。

さういふ事情のため、五年以上同じ職業で辛抱する少年は、全體の約四割ぐらゐ、商店だけの離職率は全體の八割に及んでゐます。これが習慣づけられて、あちらこちらの會社商店の流れ者となつたら、最後には本當のルンペンに墮ちて行くより外はありますまい。

桃栗三年、柿八年で、根氣よく同じところに我慢して居れば、花も咲き實も生るのですが、とかく人のやつてゐることは好く見え、それを羨ましく思ひます。魚を

釣る人の話を聞くと、多少の例外はあるが、一ケ所にぢつと辛抱してゐるのが一番よいさうであります。自分がまだ釣れないうちに、向うの人が釣ると、「あそこがよい」と慌てゝその傍に行き、又、他の處で釣つた人を見ると、「そこに限る」と、直ぐ出掛けて行く。こんな風に人を羨んでばかりゐては、結局何の得るところなくして終るさうです。

だから成功の道は「運、鈍、根」にあるので、根氣つよく粘り氣がなければならぬと昔から言つてゐますが、それと共に、移るべき時は移り、變るべき處は變ることは勿論であります。たゞ一つ處に粘る時でも、他に動く時でも、太陽の如く明るく朗かで、假りにもじめ〳〵した氣持ちなど絶對に出さず、常に緊張してゐなければなりません。邦人は西洋人に較べてとかく快活さを缺きますが、そこから心身を蝕む病魔が入り込んで來るのであります。

◇反省させられる例話

獨逸にクンツといふ貧乏人がをりました。ある日勞働に疲れての歸りに、飲食店に立ち寄り、貧しい食事で飢ゑを凌いでゐますと、頗る高級な自動車が來て店の前に駐りました。車中の男は戰爭成金らしく、高價の炙肉と上等の葡萄酒を運ばせ、車中で坐りながら食べ始めました。

クンツは羨ましくて堪らず、

「あゝ俺だつて同じ人間だのに、どうしてこんなに慘めなのか。」

と聲をあげて喚きました。車中

の人はこれを聞いて、

「そんなに俺の境遇が羨ましいのかい、それなら俺の財産と君の體と、そつくりそのまゝ交換しよう。今直ぐでもよい。」

「それは本當ですか。何といふ有難いことでせう。どうか今直ぐ取換へていたゞきたい。」と大喜びです。

車中の紳士は、「それでは！」と車を降りようとした時、從僕が駈けつけて抱くやうにして下したのを見ると、その紳士は躄でした。クンツは吃驚仰天して、

「千臺の自動車より、二本の足の方が結構。」と言つて逃げてしまつた——といふ寓話があります。

世の中は、何とこのクンツの多いことでせう。自分の置かれた處を喜んで最善の努力をつくすといふ心掛けがなく、徒らに他を羨み他を眞似るのは皆このクンツの群でありますが、私はさういふ人たちのために次の話を述べることゝします。

今から四年前、某縣の女子高等師範を優等で卒業した某婦人は、ある事情で就職

に遲れ、程經つてから某女學校の校長に世話を賴んだ所、校長の言はれるには、

「教師の口はもうどこにもありません。たつた一つある椅子は、こゝの受附だけです。これをやつて見てはどうですか。高師出の受附係は、さだめし侮辱にも感じられるでせうが、しかし本當の教育者となるには、何をやつてもソツのない『人』となることです。社會のゴミの中にまみれて、自らを信ずることのできるやうになつて始めて教育家たるの信念がもてるのですから。」

こゝまで聞くと、その婦人は頭を下げて、

「ありがたう存じます。願つてもないことでございます。」

と、心から喜んで引受け、玄關近くの受附口に坐ることになりましたが、どんな人にも慇懃に接し、その取次ぶりが極めて親切なので、來客はみな滿足して歸り、その噂が校外にまで傳はりました。

たまゝ朝鮮の某女學校の校長が生徒を連れて修學旅行に來てこの受附ぶりに感心し、どういふ人かと經歷を聞いて成程と膝を叩き、遠くてお厭でもあらうが、せ

ひ私の學校にと懇望しました。すると、どんな處でも教育の御用に立つことなら結構ですと、早速渡鮮したのであります。

朝鮮でも、その忠實にして行き届いた教へ方が評判になり、一年ほど居るうちに、内地の某女子師範から強つてと所望されました。朝鮮の校長からも、待遇はよし、出世になることだから是非赴任されたがよいと勸められ、そこへ就職したのは今から二年前ですが、この頃では令名いよ〳〵高まるばかりと聞きます。

女子最高學府の出身で、しかも在學中秀才と謳はれた人が、喜んで女學校の受附になる！　まことにこれ世のクンツ連の思ひも及ばぬことであります。果して、女子教育家として勤め甲斐あり力の入れ甲斐ある今日の立場を得たのでありますが、それは畢竟、與へられた處を喜ぶ心境の賜に外ならないことを、こゝに繰返して置く次第であります。

職業に信念を持て

◇角力とりと追剝

一人の角力とりが、夜、山の中を歩いて居りました。峠へさしかゝると、物すごい男があらはれて、

「ヤイ待て、」と大きな聲でどなるのです。驚いて「何だ。」といふと、

「今時分、山の中で人に待てと言つたら追剝に決まつてるぢやねえか。さア金を出せ、ナニ金は無いと、無ければ着てるものを皆よこすんだ。」

と、いきなり抜身をつきつけました。

角力とりは度膽を抜かれて、ガタ〳〵慄へだし、追剝のなすがまゝに着物を一枚脱ぎ二枚脱ぎして、褌一つの素裸になつてしまひました。

素裸になつた途端、

「さうだ、俺は角力とりだ。」

と氣がつくと、はじめて勇氣が體ぢゆうに湧いて來ました。

「ヨイショウ！」と四股を踏み、「サア來いッ。」と、太い拳を二つ、グッと前へ突きだすと、追剝は青くなつて慄へあがり、着物をおッぽりだしたまゝ一目散に逃げてゆきました。

×　×　×

この角力とりは、自分の職業に對する何の信念もなく、單に「めしを喰ふ道具」くらゐにしか考へてゐなかつたのでせう。だから山のなかを歩いてゐた時は、全く自分の職業を忘れて、氣も力も拔けてゐましたから、追剝の一喝に縮みあがつたのですが、裸にされてやつと自分をとり戻し、信念をとり戻すことができたのであります。

自分の職業に對する信念を失つては、人間は、もうおしまひだと言はなければなりません。

◇本當の修養は働きの中から

その家の職業は、多く親から子へと傳へるのですが、中には實業家の子息が學者になつたり、學者の子息が軍人になつたりするのも珍らしくありません。が、それは氣紛れからではなく、よく調べて見ますと、その人の祖父や祖々父かゝ、さういふ方面に趣味

があつたり、母方の實家にさういつた傾向の人があつたり、何處からか絲を引いてゐて、さうなるべき因緣が結ばれてゐるところを、更に先輩の鼓吹、時代の感化など樣々のものが肥料となつて、芽をふきださせるのであります。

だから職業は、多くの場合、天から定められたものであつて、天は必要な時に、人に必要な仕事をさせるのだといつてよいのであります。天職なる言葉はさういふところから出たとすれば、世にこれほどの大事なものはありますまい。

然らば、全力を擧げて從事し得る職業を有つてゐることは、大いなる歡びでなければなりません。職業によつてこそ、人格が磨かれ、本當の修養ができるのであります。

寺院や教會や、又は何々修養團といふものに行かなければ修養ができないと思ふのは、大きな間違ひであります。働くことをしない人が、壇上から人間の踏むべきみちを說いた所が、それは、彈丸をこめてゐない空砲のやうなもので、單なる音にすぎません。活世間に處する活修養は、本當の働きの中にのみあります。人格を磨

きあげ、充實した生活をなすには、まづ職業に固い信念を持つことであります。

然るに、自分の職業に對して信念の缺けてゐること、彼の追剝に出會つた角力とりのやうな人が、どんなに多いことでせう。それらの人たちは、信念がないために、職業に對して歡びを有つことなく、常に不平や愚痴をならべて居ります。

例へば、商賣人、官吏、醫師、政治家、文學者、その他さま〴〵の仕事に從事してゐる人に向つて、あなたのお子さんを何になさりたいのですかと聞くと、大抵の人、まづ十中の六七までは、

「何でも子供の好きなものをやらせますが、私のこの仕事ばかりはさせたくありません。世間にはいくらも好い職業がありますのに、こんな骨ばかり折れて收入の少い仕事を選んだ私は、全く貧乏籤をひいたのです。」

などゝ泣言をいひますが、自分の發奮努力の足りないことを棚にあげて、職業そのものが惡いときめられては、職業も泣きたくなることでせう。何よりもそんなことでは、第一、本當の人間になれる筈はありません。

◇賣れる店と賣れない店

私の知つてゐる男が小間物屋をはじめましたが、何時やつて來ても浮かぬ顔をしてゐるので、店の樣子が氣にかゝり、或るとき尋ねて行つて見ますと、客としきりに話をしてゐましたが、その客の歸つたあとで言ふには、

「今の男は古本屋ですが、あれはいゝ商賣ですな。小間物屋は品物が殘りがちで、澤山ローズが出るので困りますが、古本屋は市場があつて、自分の店で賣れないと見れば、すぐそこへ持つて行つて、仲間のものに買つて貰ひます。それで資本は固定せずに濟みますから、うまいものです。」

しみ〴〵羨ましさうな顔をするので、私は言つて聞かせました。

「君のやうな事を言つてゐたら、日本ぢう古本屋ばかりになつて、小間物屋は一軒もなくなるだらう。ところが、小間物屋で相當立派にやつてゐる店が非常に多いのは、小間物屋といふ商賣は決して悲觀すべきものでないことを證明してゐるわけだ。

自分の商賣に信念を失つて外の商賣を羨むくらゐ愚かなことはあるまい。それも十分やつてやりぬいて其れでいけないといふなら兎に角、漸く始めたばかりなのに、今日蒔いた種がまだ生えないと言つて土を掘りかへすやうなことをしても仕方がないではないか。

あんな男と役にも立たない話をしてゐる暇があつたら、繁昌してゐる小間物屋を見て廻り、その長所を參考にして店のやり方を改良するがよい。客足が薄いのは、まだ〳〵、まことが足りないのだと、自分を省みて一層お客大事に、商賣をはげむんだね――」

こんな風なことを話して、それから序がある毎に立ちよつて勵ましてやりましたが、この頃では商賣がやつと軌道に乘つてきて、店が繁昌しだしました。

×　×　×

同商賣の店が二軒ならんでゐて、店の大きさ、品物の飾り方など、表から見ては殆ど同じことなのに、一軒はよく繁昌し、一軒はまるで客足がつかないといふ話を

聞くことがあります。それにはいろ〳〵の原因がありませうが、繁昌してゐる方の店主は、朗かで元氣で、商賣を樂んでやつてゐるのに、客足のつかない方は、憂鬱で、取越し苦勞ばかりして、自分の商賣に信念を持つてゐないに相違ありません。

私たちの心は犬や猫にさへ響いて行きます。まして人と感應しあひ反映しあふのは當然でありますから、憂鬱で氣六かしい店主の心は、折角入らうとする客の氣持ちまで暗くして、その足を隣りの明るい店の方へ向けさせることになります。それでは店の前に不平とか悲觀とか愚痴とか樣々の杭をずらりと並べ、繩張りまでして、客を入れないやうにしてゐるのと同じです。

店が繁昌するかしないかは、結局、職業に信念を有つか有たぬかの問題になるのであります。

◇會社の重役も役所の給仕も

今更、職業に尊卑の別なしと、講釋するまでもないことです。朝早く喇叭を吹いて廻る豆腐屋でも、盤臺をかついで勝手口を訪ふ魚屋の御用聞きでも、みな客の需めるものを充たす大事な勤めをするのであります。

宮中に參內する時の大臣の燕尾服は堂々としてゐますが、理髮屋の白い上着も仕事服である以上、やはり立派であります。大學の先生も、役所の給仕も、會社の重役も、百貨店の自轉車ボーイも、皆立派な職業であつて、外務大臣が非常時の外交に肝膽を碎いてゐるとき、その弟さんが石屋で、コッ

コツ槌を揮つてゐるところに世の中の面白味があります。たゞ肝腎なのは、それぞれの仕事に精一杯のまことをこめることであります。兄さんはえらい大臣なら、俺もえらい石屋になるんだといふ眞心がなければなりません。

人を墮落させ、人の人格を磨り減らすやうな、おてんたうさんと眞正面に顏を向けられない職業の外は、みんな立派なものであります。然るに今なほ、政治家や官吏や學者などがえらく、その他のものを卑しむといつた封建時代の固陋な考へが、一隅に殘つてゐるやうであります。

長い間政黨生活をやつて、後に貴族院議員に勅選された某氏は、その子息を政治家にして自分の後を繼がせようと思つてゐましたのに、瓜の蔓に茄子が生えて、その子息は政治嫌ひの音樂好き、而も尺八の方面に行つたのであります。市井遊惰の輩の弄ぶ尺八に恥るとは言語道斷だと非常に憤慨して、とう〳〵勘當を申し渡したのであります。

然るに、子息は長い間熱心な修業を積んで、尺八界の聞ゆる名流となり、遂に

御前演奏の光榮を擔ふにいたりました。これを聞いた父の喜びは大變なもので、家門の譽れだと、早速、出入を許すことにしました。

飛んでもない親不孝だと烙印を捺されてゐたものが、家門の榮譽を產んだといふ皮肉なこの話は、職業に高下をつけたがる固陋者への、まことによき「親父教育」であります。

服部時計店の創始者金太郎翁は、はじめ父親の小さな古道具店の片隅で、こつ〳〵時計の修繕をやつてゐました。その時の時計屋といふ商賣は卑しくて、二千萬圓の大會社の服部になると時計業が俄かに立派になつたのでは、もちろん無い筈です。が、どうもそんな風に思ひたがる人は決して少くありますまい。

それは、外形のみを見てその價値を判斷する人であります。さういふ人は工場のごみにまみれ、顏ぢう黑くして働いてゐる下ッ端の職工を見ると、馬鹿にせずにゐられないでせうが、產業日本の第一線に堂々乘り出した鮎川義介氏がさういふ境遇を經て來た人であると聞いたら、さぞびつくりすることだらうと思ひます。

鮎川氏の帝大を出たのは明治三十六年。「學士様なら嫁やろか」と唄にうたはれた時代ですから、方々の會社はこの秀才の引張りだしにかゝつたのですが、氏はそれをみんな斷つて芝浦製作所へ日給三十三錢の職工としてはひつたのであります。始めは鐵屑の掃除、それから仕上工、鑄物工と經て三年ちかくの間、親類や友人などの様々の忠告に一切耳をふさぎ、下積みの仕事をせつせとしたのであります。而も氏が他日の大をなすその基礎は、實に當時において築き上げたものであつて、氏が非凡の一面は早く青年時代に發揮されたのでありました。

目の前に金がどし〳〵儲かつて、そして體裁のいゝやうな職業にばかり走りたがる人への、これは眞に頂門の一針であり、同時に職業に尊卑なし、たゞ人にありといふ言葉のよき實例でもあります。

嘘から出た誠の話（親孝行の眞似）

◇わが國民道徳の根源

吳淞の敵前上陸の際、ひとりの海軍水兵は、敵彈にあたつて仆れるとき、「天皇陛下萬歳」を高く叫び、さらに數秒の間をおいて、かすかに唇をふるはせると、

「お母さん。」

と言つて、目を瞑つたといふ話を聞きました。

陛下と母親――併せて口にするなどは、憚り多いことでせうが、激戰の眞ッ最中、今を限りの命といふときです。咎めだてなどせずに、人の子の至情に泣いてやるべきだと思ひます。

これが西洋の兵隊だと、死際に母を呼ぶといふやうなことはなく、呼ぶなら妻か

戀人の名でありませう。日本人と西洋人の違ひは、さういふところに判然と現はれてゐます。

西洋では夫婦が家庭の中心で、親子の間は互に權利を主張しあふ有樣です。たとへば、息子が嫁を貰つて獨立してから親の家に居ると間代を拂はせられるし、親が息子の家に居るとやはり間代を拂はなければならないのです。さういふ思想が日本に入つて來てから、これにかぶれた人たちは、日本固有の家族制度――國家を一大家族とまで見る國民道德の根源――を時代おくれの厄介物だとなし、孝行などゝいふと、ひどい舊弊扱ひするので、心ある人の眉を顰めさしたことも隨分長い間ですが、今事變以來、國民道德作興の叫びにつれ、日本固有の家族制度を根ぶかく張つて行かうと言ふ聲が高まつて來ました。

これは眞に喜ぶべきことであります。私は、次に孝道について少しばかりお話して見たいと思ひます。

× × ×

「孝は人の心を至純至眞、殆ど聖者の域に達せしめるもの」であると、中江藤樹先生は言はれましたが、眞に人倫の大本、孝子が誠をつくして親に事へた話ぐらゐ人の心を淨化するものはありません。

さういふ美談は昔から數限りなく傳へられてゐますが、私は現代に例を求めて、まづ、今の寺内北支總指揮官の嚴父、故寺内元帥を擧げます。元帥の孝行ぶりは、見るものをして肅然、襟を正さしめたと云はれる程で、自宅でも官邸でゝも、朝晩、老父母のゐる鄕里（山口）に向つて遙拜すること、一日も缺かさず、陸軍大臣時代、東京の邸に兩親を迎へた折などは、孝養到れり盡せりで、どんなに疲れた時でも、兩親が床に入らないうちは決して寢なかつたと云ふことでした。

元帥は金米糖のやうに尖角が多く、ずゐぶん反對黨の攻擊を受けた人ですが、この孝行ぶりを聞くと、正直で純情な人柄が偲ばれ、これなら、上から深い信賴を受け、下からも心服されて、あれだけの地位にのぼつたことが當然だといふ氣がします。

政界、實業界、學界、さま〳〵の方面で、知名の士の間に、孝行美談はいくらでも聞くことができます。米内海相の至孝ぶりや、永井遞相、兒玉前拓相の母堂に對する至純の情などもよく雜誌に出て、讀者にふかい感銘を與へたやうでした。

昔から忠臣は孝子の門より出づと言ひますが、更に、成功者は親孝行ものから出ると言つても過言ではないでせう。

ある會社で就職希望者について人物の銓衡をするとき、その人の孝か不孝かをしらべ、相當の教育を受けた若い人が、親を大事にするといふなら、まづ〳〵及第點をつけるのださうであります。

◇親の脚を洗つた話

この間、ある青年が先輩の紹介狀をもつて訪ねて來て、就職の周旋をしてくれといふのです――かういつて私の知人は次のやうな話を聞かせました。

そこでその青年の身元しらべを始めたところ、一人息子で、親は郷里にゐるといふのです。それなら兩親と一緒にくらしたら何うかと聞きますと、

「なにぶん年をとつてゐて思想が舊いもんですから、一緒の生活など到底できさうもありません。」

といふ答へです。少しばかりの學問を鼻にかけて、こんな氣障なことを言ふやうでは會社勤めをしたところでうまく行く筈はありません。そこで

私はその不心得を諭して、人間は孝行をしなければならないものだと云ひますと、孝の原理はどうで、子に何故そんな義務があるのかと訊ねるのです。こんな調子の男と理窟を言ひ合つても始まらないとおもひ、

「先輩の紹介だから就職のお世話をして上げたいと思ふが、それには條件がある。國に行つたら、お父さんが畑から歸つた時、足を洗つてあげる。それを一週間つゞけるのだ。」

その青年は、近々用事があつて國へ歸り、半月ばかり滯在するといふので、さう言つたのです。青年は、何といふ馬鹿々々しいことだと思つたが、就職の條件とあつては仕方がなく澁々承知しました。

さて、國へ歸つたその翌日、父が鍬をかついで野良から歸つて來ると、盥に水を汲んでその足を洗ひだしました。父は呆氣にとられて、たゞ不思議さうに見てゐるのであります。

かうして二日三日と過ぎ、やがて五日目に、一體おやぢは高等の教育を受けた息

子に汚れた脚を洗はせて、どんな氣持ちがしてゐるだらうと、ふと首をあげました。見ると、父の顏ぢうが涙に濡れ、頰に傳はつて流れてゐるのです。それは實に歡びに湧きあがる涙、親としての滿ち足りた涙でありました。

それを見た刹那、息子の眼からも涙は迸りでました。最早孝行の原理もない、子の義務はどうのといふ理窟もない。只親の心が嬉しくて流れた涙でありました。親のまことに打たれて、眠つてゐた子の純な魂が呼び醒まされたのであります。

約束の一週間どころでなく、半月餘りの滯在中、父の辭退するをきかずに足を洗ひ通したのですが、上京した時は、全く生れかはつたやうな素直な、溫良な好青年になつてゐました。これなら大丈夫と折紙をつけて、某會社に入社さしてやりました——といふのであります。

嘘から出た誠の、これは何といふ有難い話でありませう。

◇まづ眞似から入る

私は若い人に向つて、親孝行の話をすると、きまつて、僕たちは、まだそんな氣になれないと言ひます。それでは形だけでも結構、親孝行の眞似をして見ることだといふと、だつて内容の伴はない孝行の眞似なぞは、僞善の甚だしいものでせうと反撥します。

そこで私はこんな話をします。――これは幼ない人たちさへよく知つてゐることですが、「眞似から」といふ話になると、逸する譯には行かないのであります。

×　×　×

昔、領主が隣り村をお通りになると聞き、足腰立たない父親を背負つて、村はづれまで行つて行列を拜ませた孝行息子のことが、領主の耳に入つて褒美を下されました。

それを聞いた、村で評判の不良息子が、丈夫な父親を無理に背負つて、歸りの行列を待ちうけてゐると、領主はそれにも褒美をやらうとされます。近侍の人たちは、あれはかく〳〵の者だからと止めましたところ、領主は、

「親孝行は、眞似でも結構ぢや。褒美を遣はすがよい。」

と言はれました。

それからといふもの、その村で孝行の眞似がはやりだし、表面だけでも親を大事にと勤めてゐるうちに、本當の孝行息子があちらにも、こちらにも現はれ、近郷近在に類のない模範村になつたといふことであります。

×　×

話はこれだけですが、親孝行は眞似でも結構だとは、金石に刻み

つけて置きたいほどの言葉ではありませんか。これは前の父の脚を洗つた話の裏書をするものであつて、いよ／＼嘘から出る誠の面白さ、有りがたさがふかく感じさせられます。

世の中の大抵のものは、眞似から入つて行つて段々奥へ進むことは、習字を例にして見ても分りませう。はじめはお手本を睨みながら、一點一畫、たゞその通りに書かうとするだけの努力ですが、その努力が重なつてゐるうち、次第にその人の個性があらはれ、自分獨特の文字が出來あがるのです。どんな書道の大家でも、この徑路を踏まぬ人はひとりもありません。

だから私は、善事は須く眞似をせよと言ひ、孝行はまづ形から入つて行けといふ所以であります。

◇親と一つ心になる

然らば、嘘から出た誠――その誠の孝行とは、どういふものかと聞かれたら、親

と一つ心になることだと、私は一言でいひ切ります。

I君は某專門學校の生徒ですが、ある修養團體に入つてふかく親の恩が分り、それまでの不孝の數々を申譯ないことに思ひ、せめて孝行の眞似でもしようと決心したのであります。

その手始めに、親の言ふことは一切素直に守り、何でも親を喜ばすようにと、つとめました。さうしてゐるうち、親の有りがたさが理窟でなく、實感として肺腑に沁み込んで來ました。すると、特に孝行をしようといふ意識が何時の間にかなくなつて、親の心と一つに合體してゐることに氣づいたさうであります。

ある時、I君は世間話のなかに、何氣なくこんなことを私に言ひました。

「この間、學校へ出掛けるとき、今日は降りさうだから傘を持つてお出でと母が云ふんです。とてもいゝ天氣で、むろん傘など持つて行くつもりはなかつたのですが、母にさう言はれると、天氣がひどく惡くなつて、今にも降りだしさうな氣がするので、慌てゝ傘をもちだして行つたのです。」

私はこれを聞いて、孝道の極致はこゝだと、心の中で嘆稱せずにゐられませんでした。I君は、樂しみも苦しみも痛さも痒さも、悉く親と一緒に感じ、一緒にひびき合ふやうになつたのであります。

I君は今、級中隨一の人物として、將來を期待されてゐます。卒業後、もし會社へ入つたとすれば、己れを空しうして親と一つ心になる——その心を以て、會社のために自分の全部を捧げて働く社員となり、會社の輿望を擔ふやうになりませうし、どんな方面に向つても、つよい人格の光りは、すべての人を牽きつけずにはゐないでせう。

私は、前に成功者は悉く親孝行であると言つた意味は、これで肯いてもらへると思ひます。しかし、成功の爲めの孝行などであつては勿論なりません。孝はわが國民道德の根源であり、人間として何うでもかうでも踐んで行かねばならぬ大道なればこそ、かくは言ふのであります。

子供の生活を理解せよ

◇子供も樹木も同じこと

外套の襟を立てゝ、大人が寒さうに歩いてゐる木枯の中を、子供たちは手袋もはめずに凧を揚げたり、鬼ごつこをしたり、日の暮れるのも忘れて跳ねまはつてをります。

「子供は風の子」といひますが、彼等は風がどんなに冷たからうが、寒からうが、自由にとび廻ることに大きな喜びを感じ、さうせずには居られないまゝに動いてゐるのであります。

かういふ生々潑剌たる境地におかれてこそ、子供は若竹のやうに、スク〳〵と伸びてゆくのですが、その子供の世界を踏み荒らして、芽を摘み枝を矯めようとする

者は誰でせうか、多くの場合、それは親であります。

こんな寒空に外に出てはいけないとか、ひどく着物を汚したとか、遊んでばかりゐては碌なものになれないとか、さま〳〵の愚痴や小言をならべたてゝ、子供の生活に干渉するのですが、そんなことをして一體何の役に立つのでせうか。

私の書齋の窓の前に銀杏の小樹があります。四年前に、實を植ゑたものですが、元氣に伸びてもう三尺ばかりになり、秋には可愛らしい黄葉のながめを見せてくれます。かうなる迄に私はどんな世話をしたかといふに、たゞ採光と通風の上に邪魔のないやうにし、蟲を捕つたり水をかけたりする位ゐのもので、それ以上どうにも世話のしやうがなかつたのであります。なぜかといふに、樹木は「大自然」(或は神)の力によつて生れ、その力によつて大きく育つて行くからであります。

この點で、子供も、樹木と同じであります。

親は子を産むと云つても、男か女か、又どんな顔立やら性質やら何一つ分らないし、既に生れて來てからでも、自分の子だといふのに、齒一本、毛一本、自由に生

えさせることもできません。

親はかくまでに無力であつても、子供はぐん〳〵大きく育つてゆく樣を見るとき、「大自然」の偉力の前に襟を正さずにゐられないのであります。

では、親は子供についてどんな役目があるかといふに、私が銀杏の小樹に對したやうに子供の世界を見戍つてやるのです。それは「大自然」の力が何の遮るものなく子供の上に齎されるやうにして、

明るく正しく快活で、而も從順であるべき子供の本性をどこまでも發揮してやることに外ありません。

◇一切を抱擁する愛

大人には長い間の經驗が積み重なつて居りますが、子供は何の經驗がなく、たゞ思ふまゝに動くのであります。大人の世界は「秩序」によつて固められてゐるのに反し、子供の世界は、まだ「秩序」といふものができて居りません。だから、子供は自由奔放に、やりたいことをやり、言ひたいことを言ふのですが、子供はさうして伸びて行かれるのであります。

ところが、親は自分の持つてゐる經驗や知識から、子供の自由に、勝手にやることが氣になつてたまらず、威したり甘やかしたりして小さな型に箝め込まうとし、それが思ふやうにならないと、今度は愚痴や小言のいひ通しです。やがて、亭々として見あげるばかりの大木になれるものを、窮屈な鉢のなかで枝ぶりをひねくれさ

せるのは、殘酷でもあり、又愚かなことでもあります。

だから親は、子供の天性を生かしてやるのが、たつた一つのつとめであることを自覺しなければなりません。それには、子供の一切を抱擁してやるだけの愛を持つて、子供の生活を深く理解することです。どんな場合でも、愉快な、親切な心を以て子供に接してやることです。

二三の例を擧げて、具體的に話を進めて行きませう。

子供は風の子です。この寒空にどこをどう飛び廻つたのか、顏から着物まで泥だらけにして歸つて來たら、小言などいはずにその元氣さ活潑さを喜んでやることです。そして戰爭ごつこの手柄話でも氣を入れて聞いてやれば、子供は嬉しさに顏を輝かしませう。その嬉しさが子供を一層素直にさせるのであります。

いくら朝早く勉强するやうに言つても、夜遲くでなければ机に向はない。困つたものだと愚痴をこぼす人がありますが、それは間違ひです。世間には少しも勉强しない子供があるのに、夜だけでも勉强するのは感心なことだと思ひかへしたら、不

足心は消えてしまひませう。親のかういふ寛容な心は、やがて勉強にふかい興味を有つ子供に變らせるものであります。

兄弟喧嘩が嵩じて取ッ組みあひが始まると、こんなに亂暴では將來が氣づかはれると母親が言ふなら、父親は、

「そんなに心配するな、この頃は金をだしてまで拳闘に行くのに、家の中で無料で見られるから結構ぢやないか。」

と笑ひながら聞かせてやればよいのです。その選手たちも、十分か二十分經てば、もうけろりとして仲よく遊んでゐませう。

うちの子供は行儀がよくないので、人様の前でハラ〳〵すると嘆してゐる親があります、人を恐れず、内外の區別もなく思ふことをズバ〳〵言つてのけ、やつてのけるのが子供の本性であります。又、それでこそ元氣よく群を抜くやうにもなるのですから、子供の行儀のよくないことなどは、何の心配もいりません。

明治の文章家として鳴らした大町桂月氏の隨筆の中に、雨の日鷄が座敷へあがると、八九歳の腕白な子供（氏の次男）が泥まみれの足駄を穿いたまゝ座敷へあがつて鷄を追ひまはす、それを桂月氏がにこ〳〵しながら眺めてゐるといふ條を讀み、何といふほゝゑましい情景だらうと思ひました。氏は一度も子供を叱つたことがなく、たゞ慈愛をこめて導いてやるだけだつたと聞きましたが、當年の腕白兒、いま農學博士として學界に令名あるのも、成程と肯かれるものがあります。

以上のやうに言つても、子供を全然放任せよといふのではなく、十分な關心を以て育てゝゆくことは勿論、看過して置けないことがあつたら、叱つてやるべきであります。たゞそれは、絶對に感情的でなく、慈愛溢るゝ叱り方でなければなりません。感情的に叱ると、子供はすぐひねくれて、その純眞さを傷つけてしまひます。又叱つた後は、叱り過ぎて可哀相なことをしたとか、あれではいぢけはせぬかとか、そんなことは一切氣にかけず、虚心坦懐でゐるのが、本當の親の態度であります。

◇兄と弟の順序

明治三十九年一月、乃木將軍が滿洲から凱旋されたとき、名古屋驛で知人某氏夫妻が子供二人を連れて出迎へに來てゐました。將軍はバスケットの中から林檎をだし、わざ〳〵自分で剝いて子供にやらうとしますと、弟の方が逸早く手を出したのです。將軍はそれを制して兄の方にやり、更に別のを剝いて、弟にやりました。そして、

「兄弟にはちやんと順序があるから喃。」

と、夫婦に向つて言はれたさうであります。

私はこの言葉をあまねく世の親達に贈らなければなりません。なぜかといふに、大抵の家庭は、長幼その序を誤つてゐるからであります。卽ち親は小さいものほど可愛いので、それを庇つてやりたく、謂ゆるひいきにするのです。兄弟喧嘩をして弟が泣いて兄を訴へますと、親はいきなり兄を叱つて、にいさんの癖になぜ小さいものを虐めるのかと叱り。おやつをやる時など、小さなものから先きにして、早く喰べたくてむづ〳〵する兄の方を後にします。

すべてこの調子ですと、兄は、弟ばかり可愛がられるのだとひがみ、菓子など弟

より少くもらつたときは、兩親のゐないところで弟をいためつけて奪ひとり、それが分つて叱られると、反抗的の眼で親を見るやうになります。そして弟の方は何をしても叱られないといふ氣持ちから兄を侮り、目上を馬鹿にする驕慢兒となつてしまひます。これは實に怖ろしいことではありませんか。

だから、小さい時分から長幼の序をはつきりしなければならないのであります。

◇金の鳥居と子供の約束

ある百姓が村端れのお稲荷さんに祈願をこめながら、

「お稲荷さん、この願ひを叶へてくだされば、金の鳥居を寄進します。」

と云ひました。傍にゐた女房が驚いて、水呑み百姓のくせに何をいふのだと窘めますと、百姓は、

「金の鳥居を上げると騙して、願ひだけ聞いて貰つたら、あとはどうなつてもいゝちやないか。」と言つたといふのです。

これは、噴飯に値する話でありますが、世間の親たちは、子供に對してかういふ出鱈目をやつてはゐないでせうか。

「よく勉強するんだよ、成績が優等だつたらデパートで一番上等の汽車を買つてやるからな。」

こんな約束をしながら、いざといふ場合になると、何とかかとか言つてごまかすのでは、前の百姓と何の違ひもありますまい。而もかういふ例は擧げ切れないほど多からうと思ひます。

人が一たび口に出した言葉は、天地神明に宣誓したも同樣であります。だから、嘘をいひ、約束を破ることは、大きな惡德と言はなければなりません。私の知人で、どんなことでも子供に約束した以上、必ず實行する人がありますが、昨年の春、子供をつれて大阪へ行きました。その人にとつて非常に忙しい時なのに、どうしたのかと歸つて來てから聞くと、學校の試驗休みに大阪と名古屋の動物園を見せる約束をしたのを忘れてゐると、子供はちやんと覺えてゐて、試驗が濟むや否やサア行かうとせがまれ、困つたとは思つたが、約束を破つてはならぬと直ぐ連れて行つたのだといふのです。これでこそ本當の親だと、私は心から感じたのでした。

どんな人でも、自分の子は正しくあれ、嘘をつくやうなものになつてくれるなと念願してゐます。その親が平氣で子供に嘘をつき約束を破つては、子供の心に見す見す不純な種を植ゑつけて、大きくなると、お稲荷さんをだます百姓となり、い

かさまな仕事で世間を誤魔化す人間になるに決つてゐます。

右は一つの例でありますが、親のなすこと、云ふことは、悉く子供に影響を及ぼさずにはゐません（特に十二三歳まで）。だから、子は親の心を寫す鏡であり、親の心の脚本をそのまゝ上演して見せるものだとまで言はれてゐます。

例へば、兄弟仲のひどく惡い子供を、叱る前に反省して見たら、自分たち夫婦は喧嘩ばかりしてゐることに氣がつき、なるほど子は親の鏡だと合點されませう。

子供が、女だと思つて馬鹿にして云ふことを聞かないと愚痴を洩らす婦人があります。私はその婦人に、あなたは夫に楯つく强情な妻ではありませんか、お子さんはあなたの眞似をしてゐるのではないでせうかと聞いて見たくなります。

子供が見え坊で困ると眉を顰めて心配してゐる親は、自分たちの虚榮心の强いことに氣がつかなければなりません。

子供に食べ物の好き嫌ひがあるなら、兩親はきつと偏食して居ります。それなら先づ親から改めることです。

赤い思想にかぶれる少年は、殆ど例外のないまでに、兩親の不和な冷たい家庭から出るさうであります。

かうして列べてくると、結局よい子が欲しいなら、よい親でなければならないのであります。それは、子は親の心の鏡であるから——。さうとしたら、自分を棚にあげて只子供にのみ求め、子供をのみ責めたところで何うにもならない筈です。

眞夏の砂濱で、子蟹たちは、まつすぐに前の方へ出る歩き方を練習してゐますが、幾度やり直しても駄目です。すると自分の穴から出て來た親蟹は、

「お前たちは何といふ無器用なことだ。前へ歩くにはかうするのだから、よく覺えて置け。」

と言つて威張つて這ひだしましたが、同じやうに横へ、横へと行くのでした。

お互にかういふ子供の育て方をしてはならないことを、しつかり認識しなければなりません。

國家と運命を共にする

◇日本海々戰當時の一挿話

明治三十八年の五月、露西亞のバルチック艦隊が日本に迫つて來た時であります。東郷大將の名高い信號のとほり、まことに『皇國の興廢此の一戰』に決せられるので、國を擧げて憂慮したのは勿論であります。

そのとき、東京兜町の或る大きな株式仲買店では、店主が店員を集めて、この際、株は賣るべきか、買ふべきかといふ意見を徵したのであります。店員の殆ど全部はわが軍の勝利覺束ないといふ悲觀から、「賣る」方に一致しましたが、中にたゞ一人、敢然として「買ひ」を主張した店員がありました。

「なるほど、日本が負けた場合、株を賣つてゐた方が儲かります。しかし、日本が

負けたといふのに相場で儲けたところで何になりませう。國家あつての店ではありませんか。私は日本の海軍が必ず勝つものと確信して、斷然買つていたゞきたいと思ひます。萬一日本が負けた爲めに相場で大損したら、國民としてたゞ諦めるだけです。」

その店員は、かう言ふのでした。

この言葉につよく感激した主人は、膝を叩いて、「よしッ」と言ひざま、全力を擧げて「買ひ」に向つたのであります。

果然、眞に果然であります。わが軍大捷、敵艦隊全滅の快報は、全國民を驚喜させ、株は大暴騰、この店主は一擧にして莫大の儲けをしたといふことでありました。

これは單に儲けたからえらいといふのではなく、店を擧げて、一身一家を擧げて國家と運命を共にするといふ立派なその覺悟に私は打たれるのであります。

◇ある小學校での話

國家は今まさに、日本の興隆、東亞の平和といふ偉大なものを產み出さうとして、烈しい陣痛に惱んでゐます。我等個々人は、この惱みを喜んで受け入れ、それ〴〵に分ち擔ふことが、當然のつとめであります。

どんな場合でも、不平不滿の思ひなく、喜んで一切を受け入れる——この心構へ

について、幾たびかお話して來ましたが、非常時局に際しては、喜んで國家と運命を共にするといふ心境でなければなりません。

昨年の事變豫算は二十五億、本年は軍事費だけで實に四十五億に上るさうですが、國民はその全部を負擔しなければなりません。毎朝、魚屋が盤臺を擔いで廻り、豆腐屋が喇叭を吹いて歩く、あゝいふ働きの中から產みだされた金が、軒の雫のあつまつて大河となるやうに、國家空前の豫算を支障なく消化することになるのであります。

だから、その仕事はどんなに小さくても、我れこそ戰時の日本を背負つて立つのだといふ自覺がなければなりません。この自覺が全國民に行きわたり、協同一致、皆が心を一つにして各々の仕事に魂を打ち込むとき、そのまことの總和は、戰場の兵士と相應じて、天地神明を動かすことにもなりませう。

× × ×

明治の末頃、三重縣で模範小學校として聞えてゐた某校にあつた話であります。

天長節の祝日に、校長は教育勅語を捧讀したあと、全生徒に向つて、

「克く忠に、といふ勅語のお言葉の意味を知つてゐるものは手を擧げなさい。」

と申しました。全生徒殘らず手を擧げた中から、五年の優等生某を指名してその意味を言ふやうに命じますと、その生徒は立ち上り、

「克く忠とは、晝は學校へ來て勉强し、夜は草鞋をつくることであります。」

と申しました。國家の干城となつて、大君に命を捧げることのみを「忠」と覺えてゐる生徒たちは、どつと一度に笑ひだしました。

すると、祝典に參列のため來てゐた郡長は演壇に立つて、

「晝は學校で勉强し、夜は草鞋をつくる。かうして自分の持つてゐる全部の力を盡くすこと以外に、小學生としての忠はありよう筈がない——とかく教育が單なる知識の詰め込みになりがちなのに、かく實生活的に精神教育のできてゐるのは有り難いことである。」と言葉つよく稱揚されました。

去る第七十二議會閉會の日、近衞首相は全國民に對する告諭を發せられましたが、

その中に見逃してはならぬ一節がありました。それは、

「盡忠報國の精神を振起して、之を日常の業務生活の間に具現せしむるにあり。」

といふのですが、日常おの〳〵の職業や生活の間に忠義をつくして國へのまことを現はせよとは、いみじくも言はれたものであつて、晝は學校に、夜は草鞋をつくる、その精神を發揮せよといふのであります。

「盡忠」とか「報國」とかいふと、自分たちの手の屆かぬ上の方にある、何か特別のものゝやうに思つてゐたのが、何ぞはからん、今かうして働いてゐる仕事の中にあるのだと知つたとき、勇氣がおのづと湧いて來て、懸命の努力をせずにゐられなくなりませう。

◇法に遵ふ精神

輸入制限だとか、爲替管理だとか、戰時に入つてから多くの法案や法令が發布されました。また統制といふ建前から樣々のことが制限されて、仕事の上に生活の上

に響くものが次第に増して來ます。これは眞に由々しいことでありますが、しかし、我々は國民の一員である以上、何時いかなる時でも國家の定めるところの一切に服從して行くことは勿論、殊に國運を賭して戰つてゐる非常時には、法に遵ふ精神は一層大事でなければなりません。

これについて有りがたい話をこゝに述べさせて貰ひます。

畏れながら、今上陛下が東宮にあらせられた大正十年の春、御渡歐あそばされました。

御召艦香取が地中海を航行中のこと、御用掛として、御側ちかく御仕へ申す山本信次郎氏(海軍中將)が殿下に對し奉つて、

「殿下には、どうしてお煙草をお召上りにならないので御座いますか。」

と御尋ね申しました。殿下は御微笑あらせられ、

「山本は、予がまだ丁年に達せぬことを知らぬのだな。」

と、物やさしく仰せられたと洩れ承はります。

この時、山本御用掛のどんなに恐懼したかは、想像に餘りあることでこれを拜承して感涙を催さぬ日本人は、唯の一人もあるまいと思ひます。

國法のさだめを受け給はぬ御身にまし〳〵、殊には航海中の御つれ〴〵の折柄でも、なほ臣下の者と同じやうに、國家の法律を嚴守遊ばされるのであります。

かゝる大御心を拜承いたしますと、吾々國民たるものは、どんな法案でも法令でも喜んでこれを守り、これを實踐せずには措かぬといふ心が起つてまゐります。

それにつけて特に言ひたいことは、租税であります。事變勃發後、間もなく增税したのですが、戰爭が長びいた場合、またまた增税となるものと思はなければなりません。事業の上にも生活の上にも、これは大きな苦痛でありますが、國家の大非常時、謂ゆる遵法の精神を發揮するはこの時とばかり、喜び競うて納める美風を、全國民の上に觀たいと思ふのであります。

事變以來、陸海軍省に、或は新聞社を通じて、國民は爭うて獻金し、多くの美談が新聞の上に謳はれました。しかしながら納税も立派な獻金であります。こゝにも人を感動させる美談が出なければならないのですが、從來とかく税務の役人と納める人とはまるで仇同士のやうに啀み合ひ、納税には苦情がつきものゝ觀があります。ので、それはどうかと思つてゐましたところ、東京税務監督局の河沼事務官によつて多くの納税佳話が紹介されたのは、愉快なことでありました。

その中の一つに、東京品川區大井倉田町のS・M氏(下宿業)は、税務署の割りつけた税金が不服で抗議を申出ましたところ、時局がだん〳〵重大化したので、豁然悟るところあり、次のやうな手紙をおくつて、それを快く取消したのであります。

(前略)子供達でさへ一錢二錢のお小遣を貯へて國防獻金を致します。實に私は良心に恥ぢました。そして少しでも君國の爲に御奉公が出來得ればと存じまして、本年度の査定によつて納税させて戴きます。

いづれの道を選ぶも御奉公に變りはありません。口にはやれ慰問それ獻金と申しましても、仲々十分なことは出來兼ねます。たゞ課せられた税金を出來ないながらも納めさせて戴くのが正しい御奉公の道と存じます。

當然過ぎる程當然な事ですが、やつと氣が付きました——何卒御了承下さいますようお願ひ致します。

何といふ强いまことでありませう。百の訓話よりも、一通のこの手紙には深く敎へられるものがある筈です。

戰場の兵士は「血稅」たる兵役の義務に遵つて一命を拋つことを本分とする時、銃後の國民が納稅の義務に服することは當然すぎるほど當然でありますが、單に納稅ばかりでなく、國家が定め、國法が命ずるところの一切を喜んで受けなければなりません。そして、小異を捨てゝ大同に就くは、この際の最緊要事であり、國民みな、よきも惡しきも國家と運命を共にするの大覺悟をしつかりと握る時、自から國難突破の道が拓けて行くのであります。

――向上の道了――

向上の道

昭和十三年二月一日印刷
昭和十三年二月五日發行

著作兼發行者　佐藤義亮　東京市牛込區矢來町七十一番地
印刷所　共同印刷株式會社　東京市小石川區久堅町一〇八
發行所　新潮社　東京市牛込區矢來町七十一番地
電話牛込　長八〇五番　六〇六番　七〇七番　八〇八番　八〇九番
振替（東京）八〇八番

定價四拾錢　郵送料拾錢

初刷十萬部

大出製本

複製及び無斷轉載を許さず

改訂增補

生きる力

佐藤義亮著

三百二十二版出來——左に諸名家の批評を掲げる

正改定價四拾錢
送料十錢

正に天下一品の書

蘇峰 徳富猪一郎

新潮社々長佐藤義亮君は、身を貧寒に起し、具さに人生の辛酸を嘗めて、拮据經營、今日の大を成せる人。その事業的成功と、人格的鍛錬とを併せ得、物心兩面に亙りて洵によく生き得たるの人である。今『生きる力』一卷に豐富なる體驗を語る。例へば、千軍萬馬の老將が、瘢痕を撫して、戰場往來の思ひ出を語るが如し。をさむるところ二十餘篇、各篇悉く題し得て痛切、說き得て深切、いづれも修身齊家の活教訓ならざるは無い。語は平俗容易にして、盛るに高遠の理想を以てし、細かに日常坐臥の心得を說きつゝ、深く天人合一の至境を示すところ、正に天下一品の觀がある。讀む事一行にして一行の益あり、讀む事一頁にして一頁の益あり。予は、近來稀に見るの好著として、此の書を萬人の座右に薦めるものである。

處世の要諦を悉す

內閣參議 町田忠治

本書は、世に處して正しく生きる道を說いたものである。著者佐藤義亮氏は、東北の一隅から身を起して長い間の奮鬪の結果、今日に至れる人だけあつて、本書の內容の一つ〳〵には、其の體驗から滲み出た深い味があり、身邊座右の問題の中に、處世の要諦を悉くして、人はいかに生くべき乎を語つてゐる。文章は平明だが、強い信念を以て書かれたもので、從來の修養、訓話の書の言ひ得ざる所を道破してゐる。

悉く人生の好教訓

菊池寛

佐藤新潮社々長は、赤手空拳にして、現在の地位を築いた人である。その人が、最近宗教的信念によりその心眼を開き、處世修養の道を說いてゐるのであるから、その一話一言、悉く人生の眞實に卽した好教訓である。道は近きに在りと、而もその近きにある道を指示することは達眼の士でなければ成し得ないことである。而もそれを人に說くには、信念と情熱とがあつて、初めて力强いのである。佐藤氏の訓話が讀者を動かす力も亦そこに在るのであらう。

一大光明を與へる

陸軍少將 櫻井忠溫

兎角生きることが六つかしくなつてゐる人間である。それに生きる力を與へようといふこの書の大きな好奇心で覗いてみた。一頁々々と進む中に、頭の中に自分の大きな醜い映像が描き出されて來て、「こいつはいかん」と言つた心持になる。『自分と妥協するな』といふ一章があるが、全く今まで自分で自分を許し過ぎてゐた事がハツキリ分つて來る。生きて行けるものも、自ら殺してゐたのだつたといふことが。

眞劍といふ事は平凡な教訓のやうでも、何故眞劍ならざるを得ないかといふ事が、此書の中には大きな脈を打つてゐる。此書こそ自分を救ひ、社會を救ひ、國家を救ひ、世界を救ふ一大教書だと信ずる。あり觸れてゐない引例も一々ヒシ〳〵と胸に應へる。こんなに細かい所をどこから著者は覘つてゐるのかといふことに驚かれ、恐れる。時局艱難の折柄、此書の出現こそ、吾々の行手に一大光明を與へるものだ。「有難い」といふ一心で著者に感謝の禮を捧げる。かゝる心構へでこそ出世も出來るのだと、心から肯かしめる。社員讀本・店員讀本として、その方面の人達に是非讀んで貰ひたい書である。

社員讀本・店員讀本

東京電燈社長　小林一三

此書は、一篇一章皆著者の體驗から溢れ出た活教訓であるが、中にも社員、店員等に對して說けるものは、極めて實際的であつて、成程、

人間の生きる道を說く

遞信大臣　永井柳太郎

『生きる力』一卷は、出世成功の道を語つただけでなく、それ以上に突き進んで、本當に人間の生きる道、本當に人間の幸福であり得る道を語り、處世術の指針であり深い精神の書である。

所載廿餘篇、何れも著者の痛切な體驗から滲み出た言葉である。今や時代は一大轉換期に直面してゐる、何人も人は如何に生くべきかといふ根本的な問題を再考しないでは居られない。本書はその根本的な問題に對して答案を與へんとするものである。（談）

近衞首相以下十二家述　價壹圓四十錢　送料十四錢

日本精神讀本

近衞總理大臣・德富蘇峰氏及び、喜田・平泉・河野・藤村・松村・下田・松波・齋藤の諸博士が各專門の立場から日本精神の眞髓を說けるもの。刻下全國民必讀の書である。

武藤貞一著　價壹圓　送料十錢

英國を擊つ

著者は現代第一の軍事評論家。今事變の製造者たる英國を擊つべしと叫び、豪宕無類の大筆を以て痛論す。熱血滴る內容は、國民を奮然蹶起せしめずには措かない。

高橋航空兵大佐著　價壹圓二十錢　送料十四錢

敵機來らば

緊迫せる時局下、絕對に信賴すべき最新空軍讀本である。列强空軍の現狀を詳述し飛行機の新知識を網羅して剩さない。著者は陸軍航空本部第二課長の重職にある人。

黑田禮二著　價壹圓四十錢　送料十四錢

獨裁王ヒットラア

友邦ドイツを知らんとせば、まづ總統ヒットラアを知れ。著者は聞ゆる獨逸通で、現にヒットラアと握手し會談した經歷を持つ人、數あるヒットラア傳中の白眉である。

新潮社版

夜明け前	島崎藤村著	全二冊 一冊價各二・三〇	國家的大轉換を行つた明治維新に材をとつて神來の靈筆を揮へるもので、眞に世界の文壇を濶歩するに足る小說である。
眞實一路	山本有三著	新型美本 一・〇〇〇 ・二二	誤れる結婚と戀愛を指摘し、本當に生きんとする人の爲に其正しき路を示せる小說。萬人皆つよく敎へられるであらう。
人生劇場	尾崎士郎著	全二冊 上一・七〇〇 下一・三〇〇	【文藝懇話會賞受領作】學生々活を如實に描き人間の僞らざる愛慾の姿を示せる小說、全二冊、廉價決定版出づ、非常の好評。
心に太陽を持て	山本有三著	四六特製 一・二〇〇 ・一四	日本少國民文庫の中の一冊。眞實の美しさが滲み出る話の集。必ずしも少年と言はず、何人の魂をも淨化せずに措かない。
清水次郎長	小島政二郎著	四六紙裝 一・二〇〇 ・一二	俠・勇・艷の幾場景が描かれ、面白さは眞に天下無双。小笠原將軍は、男次郎長の面目躍如する傑作と激讃された。
新編忠臣藏	吉川英治著	四六特裝 二・〇〇〇 ・二二	現代人の感情を以て生き〳〵とした人間赤穗義士の姿を描いたもの本書を措いて他にない、作者が全力を傾倒した大作。
加藤武雄	小說の作り方	一、〇〇	高橋桂二	碁の打ち方	二、二〇
嶋田青峰	俳句の作り方	一、〇〇	大西貞治編	實用手紙の書方	一、三五
金子薫園	歌の作り方	一、〇〇	金子薫園編	現代名歌選集	一、七〇
吉川速男	寫眞の寫し方	一、三〇	嶋田青峰編	現代俳句選集	一、八〇
久米正雄	文章の作り方	一、〇〇	新潮社編輯部編	現代新語小辭典	一、四〇

新潮社版

大衆雜誌

日の出

▼記事の清新なること雜誌界第一！
▼小說の面白いこと雜誌界第一！
▼事變記事の豐富は雜誌界第一！

一家
一冊！
大滿足

記事は時代と共に動く潑剌さに充ち、
小說は大家花形總出動の傑作揃ひ。

新時代の家庭に
必ず「日の出」あり！

『向上の道』を
讀まれた方に——

『向上の道』に收めた二十篇は、殆んど『日の出』に載つたものであります。『日の出』には毎月佐藤社長の訓話がありますから、『向上の道』を讀まれた方は是非、『日の出』の讀者となつて、佐藤社長の訓話に親しんで下さい。

一冊六十錢・新潮社發行

終

新潮社出版

40錢